



相双支部ニュース

懇談会 令和7年度 福島県看護協会相双支部 「看護職責任者懇談会」

目的：地域包括ケアシステム推進のため、各施設の看護管理者と行政保健師とのネットワークづくりを行う

日時：令和7年10月10日(金) 13:30～15:30 **場所：**南相馬市立病院 多目的ホール

- 内容：1. 令和7年度 福島県看護協会事業計画 公益社団法人福島県看護協会 会長 佐藤博子様
2. 相双地域での難病患者に関する病院との連携について 福島県相双保健福祉事務所 副部長 専門保健技師 風間聡美様
3. 地域の健康課題解決に向けた各施設のさらなる取り組みについてグループでの意見交換

今年度の看護職責任者懇談会には、病院、特別養護老人ホーム、老健施設、看護専門学校などから20名の皆さまにご参加いただきました。

福島県看護協会の佐藤会長からは、看護職の育成支援や働き続けられる職場づくり、協会入会促進の取り組みについてお話しいただきました。また、専門保健技師の風間様からは、相双地域で難病患者さんが抱える生活上の課題や、緊急医療情報手帳の活用など、地域での実践がイメージしやすい内容をご紹介いただきました。

後半の意見交換では2グループに分かれ、各施設における難病患者さんの現状だけでなく、健康課題の解決に向けた取り組みについて活発な意見が交わされました。認知症や生活困窮者への支援、生活習慣改善など、地域全体で支える必要性をあらためて共有し、病院と保健師がハブとなる体制づくりの重要性が確認されました。

看護職責任者懇談会は、地域の課題を共有することで、より良い支援につなげる大切な場です。今後も多くの皆さまのご参加をお待ちしております。



研修会 令和7年度 福島県看護協会相双支部 第1回看護研修会

テーマ：「患者の意思決定を支える看護の役割」

講師：福島県立医科大学看護学部 医療人育成・支援センター 黒田るみ先生

日時：令和7年11月8日(土) 13:30～15:30

場所：南相馬市立総合病院 多目的ホール

〈研修を受講して〉医療法人社団 青空会 大町病院 木村かつき



「患者の意思決定支援」を行う時に、患者様やご家族との対話をしなければと思いつつ、時間が取れないのが実情です。私の勤務する療養病棟は、入院日数の短縮化にとらわれない反面、長期入院の方も多く家族の面会がほぼないケースもあります。会話が困難な病状の方もおり、患者様の意思が確認できず、果たして「患者様にとっての最善」とは何かを自問する毎日です。今回の研修を受講して、患者様やご家族と可能な限り対話の時間を設け、スタッフとカンファレンスを行い、悩みや葛藤を抱えながらもより良いケアを提供する事が看護師の役割と再確認できました。そして、看護を通して私自身の人となり、「自分はどのような人間なのか」と追及したいと思いました。

令和7年度相双支部看護研究発表会

日時：令和8年2月14日（土）13：00～16.00 場所：音屋ホール

講評：医療創生大学看護学部教授 後藤恭一先生

〈目的〉相双支部会員が日頃の看護業務における気づきや疑問を追求し、看護研究を行うことにより、看護の質向上を図る。

第Ⅰ群

座長：伏見 優子（医療法人伸裕会 渡辺病院）

1. 演題：面会時の患者家族への対応方法の検討

鹿島厚生病院 水戸 千春



院内感染防止のため面会制限を継続するA病院にて、家族の思いを把握すべくアンケート調査を実施した。結果、「顔が見られて安心した」との声がある一方、状態変化への不安や説明不足、声の掛けづらさが課題となった。当院は予約制のため事前に来院家族を把握できる状況にある。この仕組みを活かし、多職種での情報共有や受け持ち看護師による病状説明を行うなど、家族ケアを充実させる体制整備が求められる。

2. 演題：初めての病棟実習が看護学生に及ぼす影響

—実習での経験から得たこと—

相馬看護専門学校 林 明美



初めての病棟実習が看護学生に及ぼす影響を、自己肯定感と学習意欲の視点から調査した。実習前は9割の学生が強い不安と不足感を抱いていたが、実習後は患者との関わりや指導者の承認を通じ、61%が自己肯定感を高める感情を獲得した。自己肯定感の向上（正の体験）、知識不足の痛感（負の体験）の両極の体験が学生の意欲向上につながり、看護師育成の重要な基盤になることが分かった。

第Ⅱ群

座長：高藤 有加里（南相馬市立総合病院）

3. 演題：繰り返し同じ行動をする認知症患者の看護と対応

—落ち着きがない認知症患者の看護—

公立相馬総合病院 鈴木 翔



看護師がストレスを抱きやすい要因だった「繰り返し同じ行動をする認知症患者」に焦点をあて、今後の認知症患者対応に活かす事を目的に研究を行った。病棟看護師を対象に勉強会を行い、学びや実務経験から対象患者への思いを傾聴することや興奮状態にある時は距離をとり、拘束をせず見守るといった対応を行った。興奮や抵抗を減少させ、対応は適切であったと考えられる。今後も認知症患者に寄り添った看護を実践していきたい。

4. 演題：ターミナル期における自宅退院に向けた関わり

—アイモジンM.キングの目標達成理論を用いて—

公立相馬総合病院 棚木 唯



終末期の80代女性A氏は閉塞性黄疸・急性胆管炎で入院し、ADLが低下。夫と二人暮らしで自宅退院を希望したが、家族は介護に不安を抱えていた。多職種で連携しカンファレンスを実施、夫へオムツ交換や体位変換の指導を行い、不安軽減と在宅療養への意欲向上を図った。最終的に入院継続となったが、夫婦が安心して過ごせるよう関わった。今回の研究で、看護師の一方的な思いだけで目標を定めるのではなく、患者とその家族とコミュニケーションを通して目標を導き出すことが大切だと学んだ。

5. 演題：人工股関節置換術後の脱臼予防における意識づけと

行動変容のための生活指導アプローチ

医療法人社団青空会 大町病院 森下 穂香



人工股関節置換術後患者の脱臼予防に対する生活指導の効果を検証した。パンフレットや声掛けによる生活指導により、患者は脱臼危険肢位への意識を高め、日常生活動作の確立をすることができ、ADLの向上と安全な退院につながった。このことから看護師による適切な生活指導の重要性が明らかとなった。今後は多職種との連携を強化し、患者のニーズや生活環境に応じた患者への個別的な支援が課題である。

6. 演題：効果的なOHAT-J導入のためのNST・摂食嚥下リンクナースの取り組み

—口腔ケア体制強化に向けて—

南相馬市立総合病院 長谷川小百合



口腔評価ツール「OHAT-J」プロトコルの導入により、リンクナースを中心とした体制強化を図った。勉強会や実地指導を通じ評価基準の統一が進み、適切な食事形態の選定による低栄養予防や誤嚥リスク低減などの成果が得られた。一方で、活動への負担感や周囲の理解不足といった課題も浮き彫りとなった。今後は役割の明確化や多職種連携を深め、継続的な支援体制の構築とケアの質の向上に取り組む必要がある。

7. 演題：誤嚥性肺炎予防に繋げる口腔ケアの実践

医療法人伸裕会 渡辺病院 鎌田 彩花



高齢の終末期患者の口腔ケアにおいて、乾燥や舌苔除去の困難事例が見られた。口腔内汚染状態に合わせた口腔ケア、誤嚥性肺炎の予防に繋げるため、今回OHAT-Jと口腔ケアプロトコルに当てはめて評価し実践した。可視化したことで、口腔内環境に応じた個別性のあるケアに繋げることが出来た。また患者のQOL向上に繋げていく為にも、口唇の保湿や口輪筋マッサージの前準備を組み合わせて実践していくことも重要であることが学べた。

寄稿

相双支部看護研究発表会の解説

医療創生大学 看護学部教授
相馬看護専門学校 非常勤講師
後藤 恭一 先生

2/14に開催された研究発表会での7演題は、いずれも臨床現場の「切実な問い」から出発しており、患者様やご家族、仲間への慈しみに溢れた素晴らしい内容でした。

【客観性と個別性の融合】

全体を通して特筆すべきは、「客観的指標の導入」と「個別性の追求」の両立です。

- 標準化への挑戦：2つの口腔ケアの演題では「OHAT-J」、客観指標を用いることで、感覚に頼らないケアの標準化が模索されました。
- ケアの再構築：一方で、終末期の口腔ケアや人工股関節全置換術後の生活指導では、マニュアルを画一的に適用するのではなく、患者の身体特性や人生の最終段階における安楽に合わせ、柔軟にケアを再構築するプロセスが鮮明に描かれていました。

【目に見えない困難の可視化】

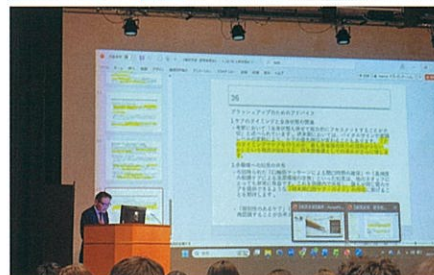
現場の看護の質を引き上げる、鋭い分析力も大きな成果です。

- 心理的ギャップ：コロナ禍後の面会制限が家族に与える影響を分析。
- 教育的価値：初学者の看護学生が抱く「負の体験」が持つ意味を再定義。
- 行動の背景：認知症患者の行動の裏に隠された「尿意」というサインを特定。これらを意味づけた視点は、看護の専門性を裏付ける強い説得力を持っています。

【今後のさらなる一歩に向けて】

1. 多職種連携のプロセス具体化：どのような対話を経てケアが変化したかという「協働の機微」を記述することで、地域包括ケアの中核としての専門性がより鮮明になります。
2. 成果の仕組み化：今回の知見を一事例に留めず、チェックシートやガイドラインとして病棟の「共通財産」へ昇華させてください。

看護は理論と実践が交差する場所で最も輝きます。皆様が導き出したプロセスは、後輩たちの道標となるはずです。素晴らしい発表をありがとうございました。



看護の出前講座

福島県ふたば医療センター附属病院 看護部長 梅宮照子

当院は、「二次救急医療をはじめとする双葉地域に必要な医療を確保し、3つの安心（①住民が安心して帰還し生活できる。②復興事業従事者が安心して働ける。③企業等が安心して進出できる。）を医療の面から支える」ことを基本方針としています。主な活動内容は、救急医療の提供、在宅・訪問診療、多目的医療用ヘリコプターの運用、地域包括ケア推進の支援、健康増進支援、交流・研修事業です。これら活動の中で健康増進支援のひとつである出前講座についてご紹介します。

地域住民の健康に関する啓蒙活動を目指して、来院される方を待つだけでなく地域に出て、看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、栄養士達が自分たちに話せるテーマを考え、郡内町村へ提示しています。毎年約30件の申込みがあり、計画に沿って各担当者が出前講座をしています。出前講座の対象は、町村によっては介護予防の一環で住民をバスで送迎し、約30人が一カ所に集まり体操後に出前講座を組み込んだり、集落ごとに公民館に集まった7～8人の住民向けに行っています。その他、学校から依頼がくることもあります。看護師のテーマは得意分野を担当する看護師や骨粗鬆症マネージャーの他、今年度から認定看護師と特定看護師もメンバーに加えたため幅広いテーマになりました。入院患者の状況や救急外来看護で気づいたことなど、不必要な受診や重症化を防げる内容や早期対応により入院や救急受診の減少が期待できるテーマで考えています。

出前講座を行うために、担当者は正しく分かりやすく伝えられるよう資料の作成を工夫しています。住民の方が、担当者の話を熱心に聞き、身近な疑問について質問をしてくれます。その素朴な質問は私たち看護師にとって大変勉強になります。“生活の中の言葉”で説明する力が鍛えられます。時には厳しい地域の声を直接聞くことができ、出前講座はすべてにおいて私たちが成長できる貴重な機会となっています。



編集 後記

今年度も2回の支部ニュースを発行することが出来ました。誌面作成に当たりご協力頂いた皆様には、深く感謝いたします。今後も会員の皆様のお役に立てる情報を発信していけるよう努めて参ります。今後ともよろしくお願い致します。

広報活動委員：中田邦子 川上久美子 阿部葉子 志賀真里枝 梅橋美幸